

給ひけり、そこにも聞給ひつらんやうに、入道あまりにおそろしき事をのみ申と聞しが、淺ましさに、或夜ひそかに忍びつゝ、内裏をばまぎれ出て、今はかゝる所の住ひなれば、琴ひく事もなかりしが、明日より大原のおくへ思ひ立事の侍らへば、主の女房こよひばかりの名残ををしみ、今は夜もふけぬ立聞人もあらじなぞすゝむる間、さぞなむかしの名残もさすがにゆかしくて、手なれし琴をひくほどに、やすうも聞出されけりとして、御泪せきあへ給はねば、仲國もそゝろに袖をまぼりける、やゝあつて仲國泪をおさへて申けるは、明日より大原のおくへ思ひ立事と候は、定めて御様などもや替させ給ひ候はんすらん、然るべうも候はず、扱君をば何とかし参らせ給ふべき、努々かなひ候まじ、相かまへて此女房出し参らすなとて、ともに召ぐしたる馬部吉上など留めおき、そのやを守護せさせ、我身は寮の御馬に打乗て、内裏へかへり参つたれば、夜はほのくど明にける、仲國やがてれうの御馬つながせ、女房のまやうぞくをば、はね馬の障子に打かけて、今は定めて御寝もなりつらん、誰してか申べきと思ひ、南殿をさして参るほどに、主上はいまだ夕べの御座にぞましくける、南にかけり北にむかふ、かんうんを秋のかりにつけがたし、東に出で西にながる、たゞせんばうをあかつきの月によすと、御心ぼそげに打ながめさせ給ふ所に、仲國つと参りつゝ、小督のどの、御返事をこそ参らせけれ、主上斜ならずに御感あつて、さらば汝やがて夕さりぐして参れとぞ仰ける、仲國、入道相國のかへり聞給はん所は恐ろしけれども、これ又勅定なれば、人に車かつて嵯峨へ行向ふ、小督のどの参るまじき由宣へども、やうくゝにこしらへ奉りて、車にのせ奉りて、内裏へ参りたりければ、幽なる所に忍ばせて、夜な夜な召れ参らせける程に、ひめ宮御一所出来させ給ひけり、坊門の女院、○土御門准母範子とは此みやの御事なり、入道相國小督が失たりといふは、跡かたもなきそらごととなり、いかにもして失はんと宣ひけるが、何としてかたばかり出されたりけん、小督のどのをとらへつゝ、尼になしてぞ追放た